

Title	国際シンポジウム：「医療人類学の最前線I・ II」
Sub Title	
Author	北中, 淳子(Kitanaka, Junko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	活動報告書 Vol.2, (2008.) ,p.49- 50
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章：シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20090300-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

開催日 2009年1月10日、23日
企画班 哲学・文化人類学班
企画者 宮坂敬造、北中淳子
講演者 大沼麻美（慶應義塾大学）、生田倫子（CARLS共同研究員）＜午前＞
 Margaret Lock (McGill University)、美馬達哉（京都大学）、香西豊子（東京大学）、
 鈴木晃仁（塾内経済学部）＜午後＞

2009年1月に、文化人類学グループでは「医療人類学の最前線I・II」と題して三田で二回シンポジウムを行った。医療・社会科学の幅広い分野からの研究者が集まり、両日とも90名を超える参加者数を記録し、ディスカッションの時間も足りない程の盛り上がりを見せた。

19世紀末の進化論や遺伝学の登場が、人間理解の根本的な変革をもたらしたように、一世紀を経て新たに台頭してきた遺伝子の言説は、人々の自己意識を大きく変化させる可能性を秘めている。ゲノム計画や遺伝子診断を通じて、私たちは今まで手にすることのできなかった自らの運命についての「神託」を受ける日が近いともいわれる。しかしその潜在的影響力にもかかわらず、専門家と一般の人々の理解の間には大きな隔たりがある。現時点での遺伝の知識・技術の不確実性は専門家には認識されているものの、単純化された言説が一般に流布することで、臨床現場で混乱が生じることも少なくない。このような問題意識から、McGill大学・医療社会研究・人類学部のMargaret Lock 教授をお招きして、先端医療技術が新たにもたらす希望と不安の両面についてお話いただいた。両日の講演とも、体系化・組織化されないが故に沈黙させられやすい、一般の人々の声にどう耳を傾けていくことができるのか、人類学的探究の将来の方向性を考えさせられる内容であった。

ロック先生は、北米における医療人類学の第一人者であり、日本でも『脳死と臓器移植の医療人類学』、『更年期：日本女性が語るローカル・バイオロジー』、『都市文化と東洋医学』等を通じて広

く知られている。第一回目のシンポジウム「遺伝、神託、バイオテクノロジー」（10日、東館8階）では、先生に遺伝研究、特にアルツハイマー病に関しての人類学的分析をご報告いただき、それに対して生命倫理の立場から東京大学の米本昌平先生に「科学革命としてのヒトゲノム計画」と日本の状況を、同大学人類学のMohacsi Gergely氏に糖尿病の人類学的調査についてご発表いただいた。また、科学史の観点から立命館大学の松原洋子先生、行動遺伝学の立場から慶應義塾大学の安藤寿康先生、そして同大の宮坂敬造先生にコメントがあった。

第二回目の「国家、感染、バイオポリティックス」（1月23日、GSEC-LAB）では、ロック先生は「新優生学」の名で一般に語られている現象に触れ、その複雑さを理解するためには、旧来型の国家からのトップダウンの権力だけでなく、慣習や文化に彩られたボトムアップの人々の欲望や社会的不平等の構造を分析する必要を指摘された。この日の第二部では、グローバル化する医療テクノロジーが、国境を越えて脅威をもたらす感染症に対してどのような攻防を可能にしているのか、またそこでどのような矛盾が生じているのか、異なる分野の研究者から発表があった。京都大学脳生理学の美馬達哉先生には感染症をめぐるリスク・パニックについて、医学史の立場から慶應義塾大学の鈴木晃仁先生には日本における近代化と感染症について、また東京大学の香西豊子氏には幕末日本における「感染」概念について、MIT・医療政治学のPeter Doshi 氏には、感染症をめぐる疫学言説とリスク概念についてご報告いただいた。

遺伝病と感染症をめぐる言説には、その脅威の性質、スティグマの有無、攻防の主体といった点で極めて対照的な特徴がみられる。このような相違点に留意しつつ、日独における遺伝学の成立について東京大学・医療社会学の市野川容孝先生にご講演いただき、総括として宮坂先生にコメントをいただいた。活発な議論となり、領域を超えて意見を交換することの面白さを確認できる実り多い会となった。司会は両日とも慶應義塾大学・医療人類学の北中淳子が担当。

(北中淳子)

CARLS

Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

慶應義塾大学グローバルCOEプログラム
論理と感性の先端的教育研究拠点

医療人類学の最前線 I：遺伝・神託・バイオテクノロジー

高岡講師: Margaret Lock
(Dept. of Social Studies of Medicine, McGill University)

日時: 2009年1月10日 (土) 13:00-17:00

場所: 慶應義塾大学三田キャンパス 東館5階 <http://www.carls.keio.ac.jp/seminar.html>

名義: 医療人類学の第一人者であり、日本でも『国家と遺伝病時代の医療人類学』『死生論: 日本社会が抱えるローカル・バイオエシクス』『都市文化と科学技術』等の著書で知られるマーガレット・ロック先生をお招きし、遺伝、医療、倫理を軸に講演いただきます。また社会学、歴史学、経済学が絡み、遺伝とナラティブ、国家・市民、政府の役割について、最新の研究を議論いただきます。質疑応答の機会をもちます。 (公費無料、事前登録不要)

Margaret Lock (McGill University)
Genomic Divisions:
Molecular genetics, Epigenetics, and Calculations of Future Risk for Alzheimer's Disease

米本昌平 (東京大学 生命倫理)
「科学革命としてのヒトゲノム計画とその後の日本、なぜはポストゲノムを例に」

Molacsi Gergely (東京大学 医療人類学)
Genomic heterogeneity: Reflections on Difference and Similarity in Diabetes Research

コメンタリー:
安藤寿康 (慶應大学 教育心理学)
松原祥子 (生命医科学 科学史・科学技術社会論)
宮坂敬道 (慶應大学 文化人類学)

司会: 北中淳子 (慶應大学 医療人類学)

主催・企画: 慶應義塾大学、和立国際教育振興財団の文化人類学・人間学研究拠点
慶應義塾大学 COE「論理と感性の先端的教育研究拠点」 文化人類学チーム
<http://www.carls.keio.ac.jp/>

CARLS

Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

慶應義塾大学グローバルCOEプログラム
論理と感性の先端的教育研究拠点

医療人類学の最前線 II：国家、感染、バイオポリティクス

高岡講師: Margaret Lock (McGill University)
日時: 2009年1月23日 (金) 13:00-17:00
場所: 慶應義塾大学三田キャンパス 東館5階 LAB <http://www.carls.keio.ac.jp/seminar.html>

名義: 北米における医療人類学の第一人者であり、日本でも『国家と遺伝病時代の医療人類学』『死生論: 日本社会が抱えるローカル・バイオエシクス』『都市文化と科学技術』等の著書で知られるマーガレット・ロック先生をお招きし、遺伝、医療、倫理を軸に講演いただきます。また社会学、歴史学、経済学が絡み、遺伝とナラティブ、国家・市民、政府の役割について、最新の研究を議論いただきます。質疑応答の機会をもちます。 (公費無料、事前登録不要)

Margaret Lock (Dept. of Social Studies of Medicine, McGill University)
高岡講師: Genomics and the State: Is an Era of Neo-Eugenics in the Offing?

奥野達哉 (京都大学 医療社会学・衛生医学)
ナノテクノロジーとしての遺伝インジェニERING

鈴木晃仁 (慶應義塾大学 医学部)
Mendel and the Transformation of Spatio-Temporal Structure of Modern Japan

香西貴子 (東京大学 医学部)
「死と性——幕末日本における感染病論」

Peter Doshi (MIT 医療倫理学/History, Anthropology, and Science, Technology and Society)
Constructing Schistosomiasis Epidemiology & Its Missing Patients

総括コメント: 市野川容孝 (東京大学 医療社会学)
宮坂敬道 (慶應義塾大学 文化人類学)

司会: 北中淳子 (慶應義塾大学 医療人類学)

主催・企画: 慶應義塾大学、和立国際教育振興財団の文化人類学・人間学研究拠点
慶應義塾大学 COE「論理と感性の先端的教育研究拠点」 文化人類学チーム
<http://www.carls.keio.ac.jp/>

